12 月 3 日のメッセージ

聖書：イザヤ書　52：　1 – 10

「地の果てまで」

今日から待降節。伝統的な教会の暦では、今日から新しい一年が始まります。期節を表すシンボルカラーも緑色から紫色に。紫は「待つ」色、「期待して待つ」ことを表します。いよいよ近くなってきた主の降誕の出来事を、心して待つ時から一年は始まるのです。

では、改めて問います。「私たちは誰を待っているのでしょうか。」「そんな当たり前のことを」と思うかもしれません。でも、私たちは誰を、何を待っているのかを常に意識しておく必要があります。そうでなければ、ついつい自分にとって都合の良い「何か」を待つことになり、本当の救い主の姿を見失ってしまうことになるからです(「しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ。」ヨハネによる福音書 7:27)。

この気持ちを、その思いを上手く悪用するのがいわゆる「カルト」と呼ばれる集団です。彼らは言葉巧みに近づいてきて、本当に待つべきものの姿をすり替えます。本当に願うべき大きく、強い願いを、いつの間にか卑近な、小さな問題へとすり替え、それさえ解決すれば全てが上手くいくかのように思い込ませるのです。

ここで不幸なのは、そういった「カルト」に取り込まれた人は、自分が「取り込まれている」ことに気づいていないこと。むしろ、自分が積極的に行動して、今の位置を選んだと思っています。いや、その選択に誇りすら持っています。だから、いくら周囲の人が「おかしい」と声を上げても、「これをわからないあなたたちの方がおかしい」と、ますますのめり込むことになるのです。

もちろん、私たちも神を信じ、様々な思いを持ち、様々な願いを心に抱いています。その意味で、私たちもまた「カルト化する」可能性はゼロだとは言えません。そうならないためにも絶えず自分自身を吟味して、自分が誰を、何を待っているのか、確認しなければならないのです。

自分を支えてくださるのは誰なのか。今の自分を誇るのではなく、私たちのために救いを実現してくださる神をその中心に置くことが大切です(「ある枝が折り取られ、野生のオリーブであるあなたが、その代わりに接ぎ木され、根から豊かな養分を受けるようになったからといって、折り取られた枝に対して誇ってはなりません。……あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。」ローマの信徒への手紙 11:17-18)。

「私が救われたのと同じように」と押しつけるのではなく、「あなたの救いのためには何が必要ですか」と謙虚に問うていく姿勢が大切です。

そして、自分の欲望の実現ではなく、神の正義の、神の平和の実現を願い続けるのみなのです。

神はこの世界の全てを救いへと招かれています(「諸国の民から自由な人々が集められ／アブラハムの神の民となる。地の盾となる人々は神のもの。神は大いにあがめられる。」詩編 47:10)。そして、私たちもまた、神が働かれ、平和が、救いが実現することを望んでいるはずです。

「地の果てまで、すべての人が／わたしたちの神の救いを仰ぐ。」(イザヤ書 52:10)

この神の言葉が、約束が実現する日を待望しています。

では、その実現のために私たちに何ができるでしょうか。先日、ある先輩牧師が、旧約聖書のレビ記を引いて、今、起こっている争いがすぐに終わるようにと願っておられました(「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」レビ記 19:18、「寄留者があなたの土地に共に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。……なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。……」レビ記 19:33-34)。

同じ聖書の民として、平和を実現するために呼びかけていくこと。「自分は安全だから」、「今、安心しているから」に安住することなく、願い、祈り続けていくこと。

平和への願いが必ず実現するとの希望を胸に、今日も私たちは前を向くのです。

08-11-30